

# 中国における山岳観光の変容 —上海市民の観光・レジャーを通して—

東 美晴

## はじめに

近年中国においては、生活水準の向上に伴いレジャー・観光への欲求が高まり、2002年時点の国内旅行者数は8.78億人と9億人に迫っている<sup>(1)</sup>。この中での一つの傾向として、「旅遊農業」「農家楽」等の農業観光、古鎮・古村観光、登山などの「戸外活動」等の形で農村や自然に対する見直しが見られる。こういった傾向の出現は、都市民のまなざしの変容に根ざすものである。

ヨーロッパにおいて「自然」および「田舎」が訪れる価値のある場所みなされていく「まなざし」の歴史については、すでに幾つかの重要な論考がある<sup>(2)</sup>。だが、伝統的文脈における自然観が異なり、その後の近代化の経緯も異なるアジア世界においては、似て非なるルートを辿ることも当然である。筆者の目的は、近代化、グローバル化による文化変化のひとつとして、現代中国における「観光のまなざし」を考えていくことにある。特に本稿では山岳に注目する。

また、現在、「観光のまなざし」の変化を実証的に捉えるために、2005年1月に上海において、市民の観光経験、観光観等に関するアンケート調査を行う予定にしている。本稿では、この調査に先立ち2004年9月に行ったインタビュー調査のデータから、上海市民の山へのまなざしを抽出していく。なお、調査地として上海を選んだ理由は、上海は中国内において平均所得、消費水準ともに高い都市の一つであり、消費における新たな傾向を捉えるのにふさわしいとみなしたためである。

## 1. 中国の山岳観に見る伝統文化と近代化

中国の山岳観光、レジャーを考える場合、少なくとも二種類の山岳の系譜を考えねばならない。それらの一方は、五岳（泰山、華山、衡山、恒山、嵩山）や四大聖山（五台山、峨眉山、九華山、普陀山）、黄山など、道教および仏教またそれに付随する風景観

等の文化伝統のもとに、廟や寺院が建立整備され、多くの文人墨客が訪れてきた山岳群である。もう一方は、信仰の対象として眺められることはあっても、近代以前にはほとんど登頂が試みられることのなかった西部、西南部の標高の高い山岳群である。

本章では、2章における分析の前提として、まず二種類の山岳の系譜を明確化しておきたい。

## (1) 伝統文化の場としての山岳

### ①仙境としての山岳

汪涌豪と俞灝敏は『中国遊仙文化』において、五岳等を含む仙境モデルとしての洞天福地の形成を記している<sup>(3)</sup>。

中国の伝説上、最も古く重要な山岳は崑崙山である。黄河の源頭に対する神秘的な信仰が、崑崙山に「天帝の居所」という位置づけを与えてきた(汪, 2000, 28)。この後、戦国時代の方仙術の出現による求仙ブームの東漸に従い、仙境の所在が東方の海上に求められるようになり、方丈、瀛州、蓬萊などの山(島)が想像されるようになる(汪, 2000, 32)。さらに道教の成立に伴い、それまで無秩序であった神仙世界が厳格な位階に基づくものとして構築される。たとえば、葛洪は仙人を上中下に分け、上仙は天界の玄都である玉京山、中仙は海外の三島十州、下仙は世間の三十六洞天と七十二福地で暮らしているとするなどである(汪, 2000, 71)。

だが、天界の玄都は下界の凡人からいえば、やはりはるかに遠く、きわめて渺茫としており、寒さに耐えられない高所という感じが非常に強く、天界は昇りにくく、天仙は追いつきにくいので、人びとは地仙になりたがることが多い。その上、地仙は神仙の戸籍ももっているし、人間に出入りして人生を楽しむこともできるものである。そこで、地仙の塵外と世間をともに享受しうる生活が、人びとの追求する最高の理想となっていく。それゆえ、道教では人間世俗の味わいを帯びていることが明白な仙境、たとえば三島十州の構築に力を注いだという(汪, 2000, 71)。しかしながら、この種の仙境もしょせん荒唐無稽であり、天に昇り地に入っても、結局、探し当てることができない。耳で聴くのは虚、目で見るのは実であるので、人びとが絶望しないように、道教は現実の仙境モデル—洞天福地—を持ち出して人びとを遊仙させるに至った(汪, 2000, 73)。

こうして登場した遊仙モデルは以下の通りである。

王屋[河南省済源市の北西部]、青城[四川省都江堰市の南西部]、羅浮[広東省の博羅県、龍門県、増城市にまたがる]、句曲[茅山。江蘇省の句容、金壇両市にまたがる]など十大洞天、五岳[東岳泰山(山東省の泰安、長清、済南三市にまたがる)、西岳華山(陝西省華陰県の南部)、南岳衡山(湖南省衡山県の南部)、北岳恒山(山西省渾源県と河北省曲陽県にまたがる)、中岳嵩山(河南省の新密、登封、鞏義、偃市四県にまたがる)]、峨嵋[四川省峨嵋山市の南西部]、武夷[福建省武夷山市の南部]、天

目〔浙江省臨安市の北部〕など三十六小洞天、茅山、嶗山〔山東省青島市の東部〕、武当〔湖北省丹江口市〕、終南〔陝西省西安市の南部〕など七十二福地であるという（汪、2000, 73）。

なお、仙という文字のもとの語源は崑崙山という山、すなわち天に昇ることである（汪、2000, 29）。この意味で仙と山とは切り離し難いものであるとともに、山中には鉱物、薬草が多く、環境も静かであるため道教の錬丹養気に向いている。このため、道教創立当初、張天師が設けた布教拠点の多くは山上にあり、信徒はみな山洞に籠もって修行したという。それゆえ、山林の洞府は道教の修行に最も理想的な場所となる。さらに、山林の風景は神秘化され、別天地たる仙郷に仕立て上げられていく。（汪、2000, 73）。

道教を中心に見た場合には、以上のような形で仙境としての名山が設定されてきた過程が理解できる。さらに、これらの中には仏教四大聖地の一つである峨嵋山や、禪宗発祥の地である少林寺が位置する中岳嵩山、道教成立以前から封禪の地であった泰山が含まれるなど、名山においては古い民間信仰から道教、仏教までもがオーバーラップしていることが読みとれる。

なお、汪涌豪は漢代末から「逍遙」が士人の生活の理想のモデルとして現れ、その中で山林での隠棲、遊仙が重要な位置を占めていたことも記している（汪、2000, 142-187）。

## ②文化的景観としての自然

本節では、黄山を例に取りあげ、名山の景観の文化的特性について示す。なお、この項は『中国悠々紀行 黄山』『世界遺産を旅する6 日本・中国・大韓民国』『地球の歩き方 中国 04～05』の3冊のガイドブックの記述をもとに記していく<sup>(4)</sup>。

黄山は安徽省南部、歙県、黟県、休寧県、黄山区、徽州区の3県2区にまたがる南北40km、東西30km、総面積1200km<sup>2</sup>におよぶ山岳地帯の総称であり、特に154km<sup>2</sup>が中国十大風景名勝区に選定されている。またこの地区は1990年にユネスコ世界複合遺産に登録されている。

名勝区内は蓮華峰（1864m）、天都峰（1810m）、光明頂（1840m）の三大主峰を中心に72の峰が連なり、水墨画の世界を思わせる景観が広がるとされる。その風景美の紹介には李白や杜甫の詩とともに、必ず明代の地理学者徐霞客の「五岳から帰来して山を見ず、黄山から帰来し岳を見ず」という言葉が用いられている<sup>(5)</sup>。この言葉は、黄山に登ると五岳さえ見る気にならない、それほど黄山の風景は美しいという意味である。要するに、黄山は風景美の観点からは名山中の名山として語られてきたのである。

黄山の観光マップを見ると、山中に慈光閣（明・隆慶年間）、雲谷寺（黄山で最初に建立された仏教寺院、南朝劉宋の元嘉年間、424～453年）、松谷庵（宋代宝祐年間、1253～1259）等の古い寺廟から、現代に至り建設された宿泊施設や見学施設など、多くの建造物があることが目に付く。これは、過去から現在に至るまで、山中に多くの建造物が

造られてきたことを示すものである。同様に、山中での移動ルートに注目すると、現在では太平ロープウェイ、雲谷ロープウェイ、玉屏ロープウェイの3本のロープウェイが整備され、相当楽に行き来できるようになっている。だが、地図からは、現在に至る以前から道が刻まれ整備されてきたことが見て取れる。これらは四万段を数える石段として、山中を縦横無尽に走っている。これは、黄山が現代に至る以前から、とりわけ歩きにくい難所がない楽に歩き回れる山として整備されてきたことを示している。しかしながら、どのガイドブックにも、山中のルートとして石段が整備された時期についての記述はない。だが、山域内の建造物と同様に、長い年月の間に何度も伸長工事や改修工事が繰り返され、現代の状態に至ったことは想像できる。建造物の有り様、山域内の石段で刻まれた道の有り様を見る限りにおいて、黄山ではある種の開発が行われてきたと捉えることができる。

また、黄山の景観を形作る「奇松」「奇岩」「雲海」は「三奇」と賞賛されてきた。黄山の観光地図を見ると、「蓬莱三島」「十八羅漢朝南海」「老虎馱羊」「孔雀戲蓮花」「仙人背兜」など、「三奇」による見所160カ所以上に雅な名前が付けられている。これらは、たとえば「仙人背兜」であれば「帽子をかぶった仙人が荷物をいっぱいに入った大きな兜を背負って、険しい山道を登っている」など、古人が自らの視野に切り取った景観のイメージを表現する言葉でもある(阿部, 2004, 8)。この意味で、黄山内を散策し、それぞれの見所において景色を眺めることは、古人の表現に託されたメタファーを解釈し、古人の視野を再生するという、極めて芸術の鑑賞に近い行為となる。言い換えるならば、黄山の風景を観賞することは、古人の感性によって切り取られた風景が展示された天然の美術館をまわる行為なのである。

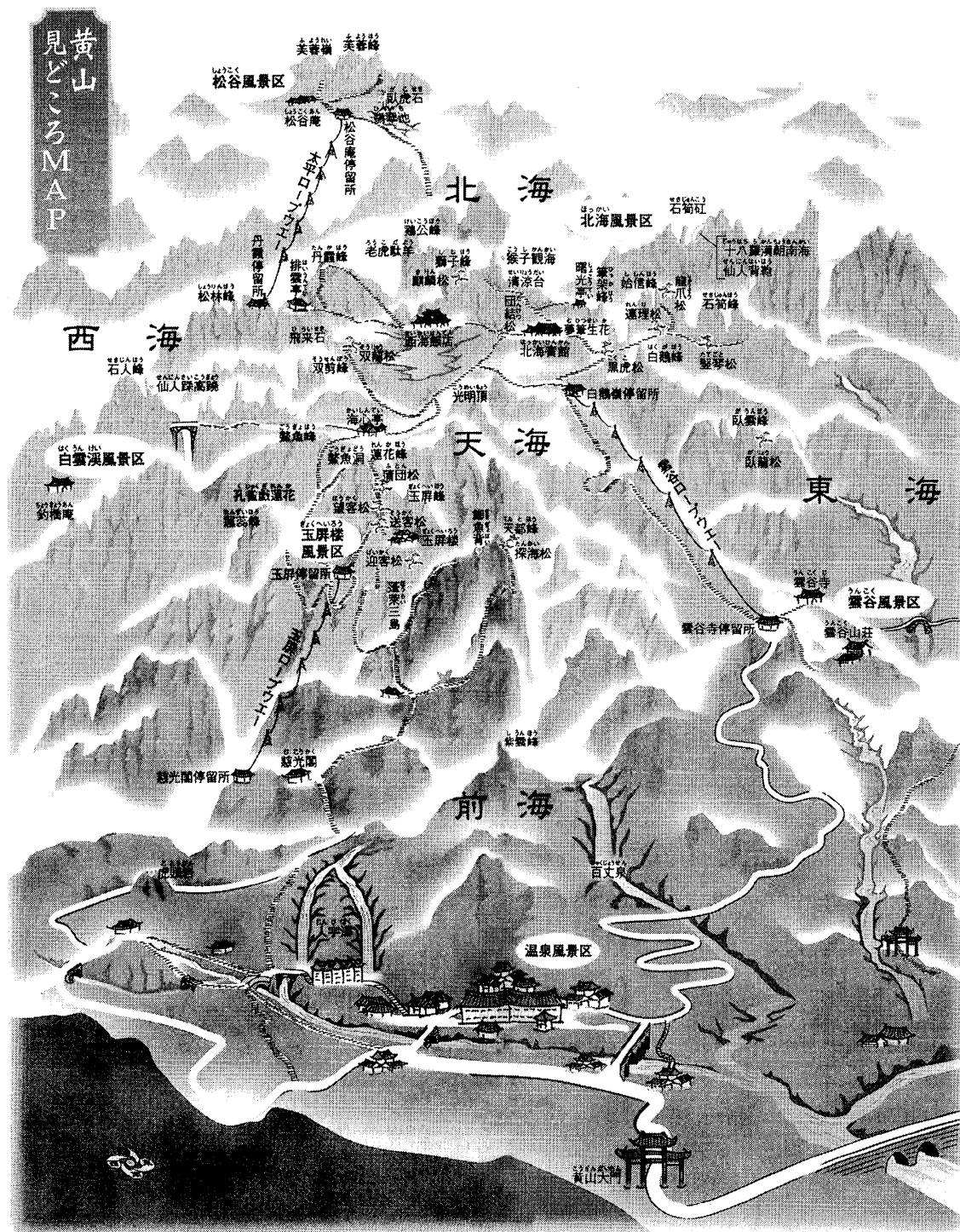
以上のように、黄山とは自然の景観を賞揚し、賛美する文化の場なのである。また、この傾向は、他の名山についても同様に見いだすことが可能であろう。

## (2) 手つかずの大自然としての山岳

### ①中国近代登山史

まず、『中国 登山聖經』の記述をもとに、中国における近代登山史を概括する<sup>(6)</sup>。

中国における近代登山は1955年に始まる。この年5月、許竟、師秀、楊徳源、周正の4名がソビエトへ登山技術学習のため派遣され、同10月ソビエト内の団結峰(6773m)と十月峰(6780m)への登頂を果たす。56年には全国総工会により北京において登山訓練所が設立され、翌57年10月に四川省内の貢嘎山(海拔7556m)への登頂が果たされる。そして、1960年5月には王富州、曲銀華、貢布によりチョモランマ北壁登頂が果たされる。さらに1964年には、許竟、王富州、成天亮ら10名により最後の8000mを越える未踏峰、夏邦馬峰への登頂が果たされる。また、1975年には、9名の中国登山隊によりチョモランマ再登頂が果たされた。現在、登山は職業的な登山家のものではなく、民間のス



出典：阿部いづみ『中国悠々紀行 黄山』小学館,2004,P10-11

図1 黄山観光地図

ポーツとして発展を遂げている。アマチュアスポーツとしての登山は、1989年の大学生による夏季登山に始まるという。その後、多くの省市に登山愛好家の団体が作られ、そ

それぞれの登山活動が組織されるばかりでなく、週末や休暇には様々な組織が多彩な戸外レジャー活動を行うようになっている（黄, 2003, 22-23）。

上記の記述の中で1955年～64年はいわば中国における初代の専門的登山家が養成され、チョモランマおよび未踏峰、夏邦馬峰への登頂を果たした時期である。チョモランマでは、1921年から38年の間に8度に渡りヨーロッパの登山隊によって北斜面の登頂が試みられるが成功せず、1950年以降南斜面登頂に切り替えられ、1953年にイギリスの登山隊によりようやく初登頂が成功する。1960年の中国隊による北斜面登頂は世界初の成功であった（焦, 2001, 222）<sup>(7)</sup>。この意味で、この時期の登山は、中国にとって国家の威信をかけた事業であっただろう。なお、この時期には専門家による登山を通して、青藏高原の地質、生物等に関する科学的調査も行われている<sup>(8)</sup>。

中国登山隊の次の成果の記述が1975年にまで飛ぶのは、文化大革命のため、登山のような文化・スポーツ事業が顧みられにくくなっていた状況が想像できる。また、1989年の大学生の夏季登山とは、北京大学登山協会・北京大学鷹社の設立と活動開始を指していると考えられる。北京大学鷹社は学生による余暇活動としての登山組織であり、中国国内での未踏峰への初登頂、民間における雪山へのグループ登山の普及など、多くの業績を残している<sup>(9)</sup>。1989年は天安門事件が起こった年であり、北京大学の学生の多くはその渦中にあったが、それとは関わりなく登山の訓練にいそしんでいた学生もあったということであろう。なお、1980年代は世界の登山史において再びヒマラヤ登頂が盛んとなった時期であり、チョモランマのみを取りあげても、多くのルートが開拓されるとともに、1990年春までに30カ国56隊299人が登頂している。こういった動向もまた、北京の大学生たちに影響を与えたであろう。

90年代には西部、西南部の山岳の観光開発も進み、登山はさらに容易となり、スキーやラフティングなどのレジャースポーツも紹介されている。この状況は多種多様な雑誌やガイドブックの発行からもうかがわれる<sup>(10)</sup>。

## ②探検・冒険旅行の対象としての山岳

現在中国において発行されているガイドブックの一つである『中国探検遊地図』では探検旅行対象の山として、哀牢山、高黎貢山、海螺溝、玉龍雪山、神農架など13カ所の自然区が紹介されている<sup>(11)</sup>。その一覧は表1に示す通りである。これらの中には、蒼山や玉龍雪山では中腹までゴンドラが設置されるなど、現在ではそれなりに観光化が進んだものもある。しかしながら、総じて「豊かな生物資源」「氷河」「原始林地区」など、手つかずの自然が紹介される。

表1 山岳紹介2 - 『中国探検遊地図』中に紹介された山岳一覧

名 称	所 在	特 色
哀牢山	雲南省新平県・景東県等5県の境界上	海拔2080 m～3166 m。国内最大、また最もよく保存された亜熱帯常緑樹林。86種のは乳類、323種の鳥類、26種の両生類、39種のは虫類が棲息。
高黎貢山	雲南省南西部ミャンマーとの境界区	中央アジア熱帯区域に属し、生物資源が豊富な場所。国家保護獣、国家重点保護獣も多い。20世紀初頭から外国人探検家を引きつける。
貢嘎山	四川省西部甘孜藏族自治州の健定県他2県にまたがる	主峰は海拔7556 m。主峰の周囲に海拔6000 m以上の峰が45座ある。「蜀山の王」と呼ばれる。標高に従い亜熱帯から氷雪帯の7つの気候区に別れるため動植物豊富。
海螺溝	四川省甘孜藏族自治州 定県	貢嘎山の東部に位置し、大都市からもっとも行きやすい低緯度、低海拔の氷河である。
玉龍雪山	雲南省麗江納西族自治县	主峰海拔5596 m。長江南岸第一の高峰。
神農架	湖北省西部、湖北省直轄の林区	海拔3000以上の高峰を6座、内部に持つ広大な原始林地区。長江と漢江の分水嶺をなす。土家族居住地。
黒竹溝	四川省南部イ族自治州	最高点、海拔4228 m。大パンダの一種、花熊貓等、希少動物が多く生息。
墨尔多山	西藏丹巴県	主峰海拔5000 m
天山	新疆中部	6000 m以上の高峰40座以上。主峰7435 m。天山山中の瑤池は西王母が住む仙境と伝えられてきた。
瓦屋山	四川省洪雅県	最高峰3522 m。俗称蜀山。古くから、東に峨嵋有り、西に瓦屋山有りと言われてきた。3500余種の野生植物、470余種の野生生物。大パンダ、小パンダ等希少動物も多く棲息。
五指山	海南省五指市	海南島の象徴。主峰1867 m。
八大公山	湖南省張家界市武陵源地区	海拔1500 m以上の峰87座。長江南部地区における最大規模も、もっとも完璧に保存された原始林地区。土家族居住地。
蒼山	雲南省劍川県	主峰海拔4112 m。

出典：成有子、姜宝義編『中国探検旅遊地図』海天出版社、2003年

### ③神秘としての自然

表2にあげた山岳地帯は必ずしも中国、漢族の歴史と無関係ではない。たとえば、天山山脈の瑤池は西王母が住む仙境と伝えられてきた。神農架は遙か太古に疫病が流行した際に、天下の百姓を哀れんだ神農（炎帝）が百草を嘗め、選んで田に播き、薬を採り

病を治したとされる場所である（袁, 1993, 55, 91）<sup>(12)</sup>。しかしながら、これらは伝説というよりもむしろ神話であり、象徴的場所として伝えられてきたものである。この点では、多くの人びとが訪仙し、現実にその足跡を残してきた五岳や三十六小洞天などとは異なっている。

また、これらの中には近年に至って、新たな伝説が語られ始めた場所もある。

たとえば、黒竹溝地区では多くの不可思議な物語が語られている。その一つは地域内での行方不明事件である。最も古いものでは解放初期、胡宗南残部の約半数三十名が溝内に入ったが、まったく行方はわからなくなった。そこで、解放軍の三名の偵察兵は甘洛県方面から溝内に入ったが、やはり一人も生還するものがなかった。次は1976年のことであり、四川森堪一大隊の三名が溝内で失踪し、三ヶ月後に三体の骸骨が発見された。さらに、1995年には解放軍某部の測量部隊がその付近で測量を行っていた時、うちの二名の兵士に食糧を買いに行かせた。二名はその途中、黒竹溝内で失踪し、のちに二名の武器だけが発見されたというものである。こういった事件が頻発するため、黒竹溝は「中国のバミューダ」「恐怖の死亡の谷」などの名前を冠されているという。さらに、これを飾るものとして、黒竹溝には肉食の大パンダ、頭部が成人の拳ほどもある大蛇、両頭の獣、野人などの不思議な動物、底なしの洞窟やその谷の水を飲むと病にかかり死亡するという死の谷など恐ろしい場所にまつわる物語が多くある（成, 2003, 63-70）。

また、神農架の野人も現代の伝説の一つであろう。これについては、中根研一が『中国「野人」騒動記』において詳述している<sup>(13)</sup>。神農架は1959年に開発部が組織され、「それまで人煙まれな原生林地帯だった土地に、およそ8年の歳月をかけ道を切り開き、車道が通じたのは実に1966年のこと」であり、その後、木材などの資源を豊富な原生林に求める人が流入し林業で栄える（中根, 2002, 20）。この神農架で野人の報告が相次ぐのは1970年代であるという。そこで、1976年から1977年にかけて中国科学院が研究者を派遣し、国家レベルで大規模な調査が行われる。さらに、1980年にも国家レベルの調査隊が送り込まれるとともに、野人の捕獲に10万元の懸賞金がかけられ、その報道は中国国内のみならず世界にも発信される（中根, 2002, 35-38）。だが、これらの調査を通し、神農架では森林伐採と動物乱獲によってその自然に大きなダメージを与えられていることが明らかにされ、神農架の自然保護が模索されるようになる。こうして、1982年、湖北省人民政府が神農架林区の四分の一を省級自然保護区に指定、1986年には国務院によって「国家森林と野生動物類型保護区」に指定、1990年に国連ユネスコの「人と生態系保護区」に指定、1992年には世界銀行の「生物多様性保護」の資金援助項目に入る。そして、1994年に国務院の批准を経て対外解放される（中根, 2002, 68-72）。その後は急速に観光化が進んでいく。中根が「野人」報道に接し調査を行った1990年代後半は、「野人」をある種のキャラクターとして神農架の観光キャンペーンに利用し、多数の野人本やビデオの発売、イベントの開催などが行われていた時期であった。



中野は『山海経』や『搜神記』などの古典文学に「野人」イメージの源流を見いだしている（中根, 2002, 201）。黒竹溝において語られる「両頭獣」や「巨大蛇」などの奇妙な獣たちも、そのイメージの源流は同様のところに落ち着くであろう。こういった古典的イメージから冒険・探検旅行の対象としての山岳を見た場合、今まで人を拒んできたからこそ、その美しさも恐ろしさも一層神秘的な自然—桃源イメージが浮かび上がる。いわば、現代の中国人は、仙境よりもさらに遙かな桃源へも、近代的、科学的知と技術をもって、安全に観光へ出かけるということになる。この基盤に、1990年代以降登山が民間に流布し、近年に至りレジャーとしてのアウトドアの普及があることは指摘するまでもない。

なお、表1にあげられた山岳がすべて少数民族地区に位置することには留意しておきたい。すなわち、解放初期、文革期を通して政策的に北京、上海などの都市部から、多くの漢族青年が移動させられている。1960年代～70年代には、これら知識青年たちによって、漢族にとっては異境であった、それぞれの地域があらためて発見され、開拓されていく過程があったであろう。そこでは、山にまつわる様々な物語が生まれたことも想像できる。だが、文革当時は迷信につながるような荒唐無稽な物語は語りにくい時代でもあった。こういった状況も含め、この過程については、次の課題としていずれ検討を試みたい。

## 2. 上海人の山岳観光経験

本章では、上海において行ったインタビュー調査のデータから、インフォーマントらの実際の旅行経験や旅行・レジャーに対する考え方を提示する。これを通し、現実ゲストとして出かけた人びとの山に対するまなざしを取りあげる。すなわち、(1)において調査の概略を示し、(2)において、調査データを通し解放後における上海市民の簡単な旅行史を示す。その上で、(3)において、調査データの中から山岳観光に言及したものを抜き出し、その傾向の分析を行う。

### (1) 調査

2004年9月5日～12日にかけて、上海市内において20歳代から60歳代の30人の男女を対象に、旅行経験、旅行観等に関する聞き取り調査を実施した。今回は整理済みの24件をもとに報告を行う。

表2に簡単なインフォーマントのリストを示している。これらの中には夫婦でインタビューに応じたケースもあるが、ここでは主として回答した者の性別を記している。インフォーマントの分布は20代4人（男性1、女性3）、30代2人（女性2）、40代4人（女性3、男性1）、50代11人（女性10、男性1）、60代3人（女性3）となっており、全体に女性が多く、その中でも特に50代が多くなった。これは、もとは調査の実施にあた

り各年代、性別が均等になるようにインフォーマントの配分を行う予定であった。しかしながら、インフォーマントの紹介をしてくれた街道委員会幹部が女性に偏っており、そのネットワークも女性中心になっていること、また早期退職等により50代女性は比較的平日に家にいることが多い等の理由で、このような結果となった。

表2 インフォーマントリスト

No.	性別	年齢	No.	性別	年齢
1	女性	32 歳	13	男性	51 歳
2	女性	51 歳	14	女性	66 歳
3	女性	43 歳	15	男性	53 歳
4	男性	53 歳	16	女性	38 歳
5	女性	56 歳	17	女性	20 歳
6	女性	53 歳	18	女性	59 歳
7	女性	60 歳	19	女性	52 歳
8	女性	24 歳	20	女性	46 歳
9	女性	59 歳	21	女性	69 歳
10	女性	40 歳	22	女性	56 歳
11	女性	50 歳	23	男性	44 歳
12	男性	23 歳	24	女性	20 歳

\* 調査は、H15～17年科研費研究『グローバル下のアジア諸国における観光の包括的研究』の一環として、上海社会科学院・社会学研究所・徐安琪先生の協力を得、根橋正一（流通経済大学・社会学部）、朱思淋（流通経済大学・経済学部）、呉軍（流通経済大学・経済学部）、井上寛（流通経済大学・社会学研究科・博士後期課程）とともにいった。

## （2）上海市民の旅行経験

本節では、時期別に上海の人びとがどのような旅行を行っていたかを整理する。

### ①1950年代

今回のインタビューにおいて最も古い時期の旅行に関する言及は1950年代のものであった。これは、ケース1、2の2件である。両者とも1950年代半ば頃の記憶について語っている。1955年前後は、1949年の革命後、社会主義による計画経済体制が整備されていく時期であり、上海においても公私合営が進められていた。1、2のケースでは、ともに行き先は蘇州であり、団体旅行であったことがわかる。上海—蘇州間は鉄道では84kmの距離にある。現在では一日30便以上ある特快列車（所要時間50分）で結ばれているのみならず、バス便も多い。だが、当時の交通事情や経済水準を鑑みると、蘇州への日帰り団体旅行は極めて旅行らしい旅行であったのだろう。

ケース1：一番最初の旅行は10歳頃（1955年頃）に親と一緒に蘇州へ行ったことです。旅行会社の人と、叔父や叔母と一緒にした（No.18, 59歳・男性）。

ケース2：初めての旅行は1954年のことで、鉄道局が主催した旅行に、会社から共青団員として派遣したもらったものです。蘇州への日帰り旅行で、5元負担しました。その一行は30人～40人ぐらいで、虎丘などへ行ったことを覚えています（No.21, 69歳・女性）。

## ②1960～1977年

1960年代に入ると、旅行経験は「探親（親族訪問）」を通して語られる。これはケース6の77年の旅行について語ったものまで続いている。この時期は、文化大革命とその前後を含み込んでいる。このことを鑑みると、観光旅行やレジャーなど、消費を目的に旅行を行うこと自体が、階級闘争の観点からは批判されても当然の時期である。

また、50年代の半ばから始まった「上山下郷（都市の知識青年を農業生産活動に参加させること）」運動に一層の拍車がかかった時期でもある。1968年12月に毛沢東が「知識青年が農村へ行き貧下農を受け入れ再教育することは大変重要である。都市の幹部およびその他は、自分の中卒、高卒、大卒の子女を農村に行くよう説かなければならない。各地の農村の同志は必ず彼らを歓迎するだろう」との指示を出し、その結果1969年末には上山下郷の知識青年の総数は467万人あまりに達したという（焦, 2001, 366）。さらに、「上山下郷」には大きく二つの形式があり、一つは蒙古、新疆、東北、雲南等の生産兵団にいくことであり、こちらは少ないながらも給与、公的医療、親族訪問休暇があった。また、こちらの形式で下郷を経験した人は組織の集団生活を過ごしていた。もう一方は、さらに多くの人々が辺鄙で遠く、後れた、貧しい農村へ行き、分散して「知識点」を設置し、自力で食糧生産を行ったという（焦, 2001, 366）。インフォーマントの中にも、「上山下郷」の経験を持つ人は少なくない。こうした人びとにとって、たまに実家に戻るものが精一杯の休暇であり、観光旅行は想像し難い時代状況でもあった。

ケース3：初めての旅行は1962年頃、蘇州へ行ったことです。また14歳の時には南京へ行きました。祖母がいたので、色んなところへ行ったことがあります。この初めての旅行は妹と2人で行きました。その後は、従姉妹と一緒に行了きました。すべて夏休みを利用しての旅行です。当時、従姉妹は10歳でした。まだ小さかったので家の人が誉めてくれたことを覚えています。鉄道を利用して行ったのです。南京へは何度も行ってます（No.22, 56歳・女）。

ケース4：また個人でも、68年に旅行をしました。大学を卒業した時のことで、当時旅行をすることは珍しかったです。この時は蘇州、無錫に行きました。というのは、軍属をしていた親戚が当時蘇州におり、探親として行ったのです。当時、軍幹部の給料は高かったので、それを目当てに、そこへ遊びいったわけです（No.7, 60歳・女性）。

ケース5：70年代に広州へ何度か行きました。探親であり、目的はお見舞いでした。3、

4 日かけ鉄道で行きました (No.18, 女性・59歳)。

ケース6：初めての旅は1977年、杭州に行ったことです。兄の奥さんと一緒に行きました。理由は奥さんの親戚は杭州にいるからで、そこに泊まることができました。母を含め3人で行きました。風光明媚なところが良かったです。観光地を巡り、4日間旅行をしました (No.20, 46歳・女性)。

### ③1978～1989

ここでは、敢えて改革開放から天安門事件までを一つの時期として括った。

ケース7は70年代のいつ頃からなのか時期がはっきりしていないが、ケース8からケース14までを概括すると、この時期に至り、ようやく会社からの慰安旅行、休暇を利用しての個人の観光旅行が登場することがわかる。

また、図2には1985年以降の国内旅行者数の推移を示している。85年から89年の間の旅行者数は2.4億から3億の間であり、2002年のおよそ3分の1程度である。しかも、この中には会議等の公務、商用等も含まれる。観光・保養等、消費を目的とした旅行者の数はさらにこれを下回る。この理由として、ケース10に見られるように、80年代における個人での旅行はまだ極めて高価であったことが考えられるであろう。

ケース7：会社からの最初の旅行は70年代だと思います。普陀山とかそんなところへ行きました (No.7, 60歳・女性)。

ケース8：一番最初の旅行は79年に青島に行ったことです。この時は会社の旅行でした (No.11, 女性・50歳)。

ケース9：1980年代に、会社から旅行に行くようになったと思います (No.6, 53歳・女性)。

ケース10：記憶の中にある最も古い旅行は21年前 (1983年) のことです。子どもが小さい頃に家族旅行をしました。この時は日帰りで蘇州へ行きました。旅行会社の団体旅行 (青年旅遊団) で行きました。知り合いの家族、何家族かと一緒に参加しました (No.4, 男性・53歳)。

ケース11：泊まりがけで行った最初の旅行はあまりよく覚えていませんが、18年前 (1986) のことだと思います。1週間杭州へ行きました。長い休暇がとれたので個人旅行をしたのです。当時は残業もあるし、休みもなかなか取れませんでした。休みを貯めていき、1週間の休暇を得たのです。会社からの補助金のようなものはありませんでした (No.4, 男性・53歳)。

ケース12：1986年頃に夫婦で北京へ行きました。1週間程度滞在しました。婚前旅行です (No.23, 男性・44歳)。

ケース13：最初の旅行は27歳の時に行った北京旅行です。この時には泰山にも行きま

した。ハネムーンでした。86年頃のことです。当時はハネムーンは流行していませんでした。また、当時でも自由旅行はできました。費用は2000元ぐらいかかりました。当時の工資は安かった（58元／月でした）ので、とても高価な旅行でした。この旅行へは何年もお金を貯めて行きました。結婚時、伝統的にはたくさんの人を呼んでの宴席を設けますが、それを行わない代わりに北京へハネムーンに行きました（No.3, 女性・43歳）。  
ケース14：個人で旅行へ出かけた最初は1989年、温州の蒸当山へ行った時です（No.6, 52歳・女性）。

#### ④1990～2004

90年代になると、急激に旅行経験に関する言及が増加する。これは図2に示した旅行者数の推移と対応する現象である。また図2からは、旅者総数が91年から95年の間に3億から6.29億と倍増していることが読みとれる。これは中国の経済が飛躍的に発展し始めた時期にあたっている。

なお、90年代にはそれ以前になかったものとして、海外旅行の経験が語られるようになる。ここでは、90年代の旅行経験の全てをあげると煩雑になるので、90年代における顕著な傾向を示すものとして海外旅行に関するもののみをあげておく。ただ、90年代の海外旅行はほとんどが親族訪問か仕事によるものであり、純粋に観光旅行として語られるのは99年のケース19におけるタイ旅行以降である。これは、それぞれの国家が観光目的での中国人旅行者の入国を解禁するかどうかに関わっている。

ケース15：91年に香港に行きました。姉がいるので、母と2人で親族訪問をしました。姉に案内してもらい、ショッピングセンターなどへ行きました。姉がいるから香港へ行くことができました。申し込んでから許可が下りるまで時間がかかりました（No.20, 46歳・女性）。

ケース16：最初の海外旅行は1992年のドイツです。当時はまだ海外旅行は自由化されていませんでした。この時はドイツで博覧会があり、会社の取引で行きました。この時期の会社の旅行はよかったです。お金はかからないし、バスを用意するのも会社だし、自分で心配することはありませんから（No.7, 60歳・女性）。

ケース17：最初の旅行は98年12月、親族訪問で日本へ行ったことである。妹が日本人と結婚して日本（渋谷）に住んでいる。日本へはこの後もう一回行った。行くときには2ヵ月くらい滞在する。日本滞在中に箱根・富士山・ディズニーランド、横浜、フジテレビ（お台場）などへ行った。日本の印象は先進的できれい。公共マナーの面がよい。交通がとても発達している。マイナス面は、日本の服はとても高くて買えない。日本へ行くのは妹がいるので楽しい。3月の桜の季節に行ってみたいと思う。また、他の国へも行ってみたい。ただ、日本の場合は住む場所があるので便利だが、他の国ではそうも

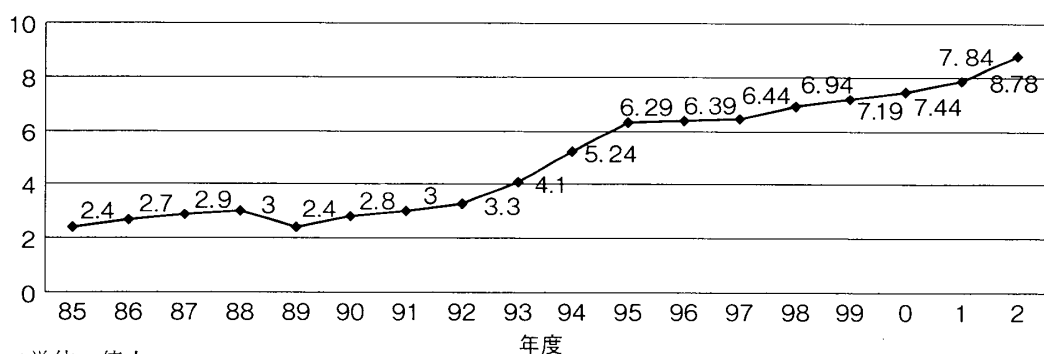
いかない。日本のラーメンやスシは食べ慣れたのでおいしい。水がいいので髪を洗ってもサラサラだ。デパートはともかく高い。アルバイトができればいいけど、そうはいかないので、買えない。妹が買ってくれればいいけど。いつも見るだけ。それと、日本は映画みたいにきれいだと思う、道は狭いけれど（No.10, 40歳・女性）。

ケース18：一番印象に残っているのは2002年のカナダ旅行です。娘夫婦、私たち夫婦の4人の旅行でした。娘夫婦がオタワにいたので親族訪問を行った時の旅行です（No.7, 60歳・女性）。

ケース19：旅行へは年に最低1回は行きます。今年（2004年）は娘と2人で韓国へ行きました。団体旅行です。行き先はソウル、プサン、済州島などです。旅行費用は2人で1万元でした。韓国の印象はあまりよくないです。韓国は特色のあるものが全くないような感じがしました。また、タイ、香港、廈門にも行きました。タイに行ったのは5年前（1999年）です。タイは特色があって、韓国よりもよかったです。具体的に言うと、タイ旅行にはオプションが多いです。海でヨットで遊んだり、大学へ行ったり、見るところがたくさんあって楽しかったです。タイ旅行の代金は5年前なので当然今よりも高いです。海外旅行の価格はだんだん下がっています（No.6, 53歳・女性）。

ケース20：7月に香港に行って来ました。香港には毎年3回、時には4回ぐらい行きます。これは夫の勤務先が香港資本の会社であり、香港で仕事をしているからです（No.3, 女性・43歳）。

ケース21：この9月にオーストラリア・ニュージーランドに行くつもりでしたが、会社の取引が忙しくてチケットが取れませんでした。そこでヨーロッパ5カ国へ行くことにしました。まだ詳しいコースの内容は決まっていません。というのは、まだ旅行会社に伝えただけで、向こうが連絡してきていないので。この旅行は会社からの旅行です。私の会社では年に1回海外旅行をするようにしています。会社の全員でいくものです。社員の家族が望めば、実費を出せば行くことができます（No.7, 60歳・女性）。



\*単位: 億人

\*『中国旅遊人口研究』『中国旅遊発展: 分析与予測』から作成

図2 中国における国内旅行者数の推移

### (3) 現代上海人の山岳観光

インタビュー調査において、近年の経験として山岳観光および山岳関連のレジャーに関する言及が得られた件数は8件であり、決して多くはない。しかしながら、年齢層別に整理していくと、この8件のうち、半数の4件を20歳台が占めていることがわかる。また、30歳代以上と、20歳代との間には、その語りの内容にも違いが見られる。本節ではそこに着目し分析を行う。

#### ①30歳台以上

ケース22から25において旅行先として示された山岳は、大明山、廬山、三清山、黄山の4カ所である。廬山は黄山と同様に道教徒によって仙境の一つとされるとともに、1996年にユネスコ世界文化遺産に登録された山である。また、廬山は1885年にイギリス人宣教師によって別荘が建てられたのに始まり、1927年には887棟（うち外国人のものは518棟）の別荘が建ち並ぶ保養地となり、さらに廬山会議が行われた場所でもある<sup>(14)</sup>。三清山は江西省東部にある道教の聖地として著名な山である<sup>(15)</sup>。近年、ゴンドラが設置されるなど、観光整備が行われた。大明山は浙江省臨安市にある浙江小黄山と呼ばれる風光明媚な山であり、杭州周辺の新しい観光地となっている<sup>(16)</sup>。

以上のように、これらのケースでは、廬山における近現代の位置づけを除くと、総じて伝統的文脈における文化的な山が行き先として選ばれていることが読みとれる。また、三清山や大明山など、仙境や宗教的聖地とみなされる山であっても、知名度が低かったものが、現代的に整備され、観光地化されている現状も見取れる。

ケース22：一番楽しかった旅行は最近、大明山へ行ったこと。景色がよかった。苦勞しなくても山上に出られるし、仲間も楽しいし。この旅行へは12人で出かけました。2泊で、費用は1人あたり100元程度でした。安いのは、向こうに友達がいて、サービスしてくれたから（No.1, 女性・32歳）。

ケース23：去年10月頃、息子と2人で黄山へ行きました。この時には旅行社を使いました。自分のよく知らないところへ行くには旅行社を使い、よく知っている場所へ行く時には個人で行くようにしています。黄山はよかったです。特に風景がよかったです。自然の風景が好きですが、息子が学校へ通っているのであまり旅行へ行く時間がとれません。退職したらあちこち行きたいと思います。登山が大好きです。大理なんかは良いと思うが、まだ行ったことがありません（No.3, 女性・43歳）。

ケース24：旅行へはよく行きます。最近江西、廬山、三清山などへ行きました。廬山には10日前に行ってきたところです。自然の風景がきれいで楽しかったです。家族3人で行きました。個人旅行です。交通機関は列車を使いました。まず列車の切符を買って廬山まで行き、そこで旅行社を利用します。廬山の観光は旅行社の観光バスで行い

ました。2泊3日でした。費用は2000元に満たないぐらいです。また3人で行きたいと思っています (No.4, 53歳・男性)。

ケース25: もっとも印象に残っている旅行は97年に出かけた三清山です。娘と夫と3人で団体旅行に参加しました。正確に言うと、この旅行は夫の会社の仲間の旅行であり、それぞれが家族を連れて行きました。総勢は26人でした。列車で行き、向こうでバスを借り切り、ガイドさんを雇い案内してもらいました。いわゆる半自助旅行です。期間は8泊9日、費用は3人で3000元でした。夫の会社からの補助も、一家庭あたり700元程度ありました。三清山の山上に女神峰という場所があり、ここの景色が良いのです。特に、朝焼け、夕焼けがきれいでした (No.11, 女性・50歳)。

## ②20歳台

まず、行き先として上げられた山を見ていくと、ケース26、ケース27では、黄山、泰山など、いわゆる名山の名前があげられた。しかしながら、ケース26では、「山に登るのは、登ると景色がいいから。登山靴、登山用のバックパックなどは持っている。3年前に用具を買い始めた。行くときには登山好きの友人と行く」、「山へ行く時には、探検的なことを目的にしており、裏側の道のないところなど、人の行かないところへ行く」など、山岳観光というよりも軽登山の色彩が強い回答となっている。また、ケース28で語られた雁蕩山は温州市蒼南県苧溪鎮と泰順県九峰郷の間に位置する浙南九塞溝と呼ばれる九峰尖の主峰である。標高は1237mとそれほど高くなく、軽装備で登ることはできるが、テントおよびシュラフが必要な山である (黄, 2003, 366)。さらに、ケース29はこれら4ケースの中で唯一の男性インフォーマントによるものであるが、ここで行き先として語られた姑娘山は四川省甘孜県日隆鎮四姑娘山風景区内の、四姑娘山のうちの一峰であろう。四姑娘山は長年の積雪のため山色が秀でており「東方のアルプス」と呼ばれ、最も高い四姑娘峰の標高は6250mである。次いで三姑娘峰5664m、二姑娘峰5454m、大姑娘峰5335mである。また、二姑娘山の現在中国国内における登頂成功者は60人前後であると記されている (黄, 2003, 241-242)。すなわち姑娘山は本格的な装備ばかりでなく、相応の登山技術も要求される山である。なお、ケース29において今後行ってみたい山としてあげられている慕士塔格は西崑崙山脈にあり、公格尔、公格尔九峰とあわせパミール高原三高峰とされる、標高7546mの山岳である (黄, 2003, 101)。

以上のようにケース27を除くと、山岳観光というよりも登山について語られており、先に示した30歳台以上とは大きく傾向が異なっている。

そこで、比較的の山について詳しく語られたケース26とケース29から山を好む理由を見ていく。

ケース26では、山を好む理由は、「ずっと上海に住んでいて、ビルばかりで周囲の環境が悪いから、違う環境の場所へ行きたいという気持ちがある。また登山には健康促進



の面もある。それに、私は外国の風物よりも、国内の自然など、中国のオリジナルなものを発見したい。登山にはそれがある」と語られる。また、ケース29では、「山の奥は気持ちが良い。動物も見える。空気もいい。上海という都市はにぎやかだけど、空気が重い。私は静かな場所が好きだ。昔から山に登りたかったが、それは思うだけだった。ネット上にクラブを見つけ可能になった。山に登りたいと思い始めたのは、映画をみたりして憧れるようになった」と語られる。

両者において、都市としての上海観と、山の自然観はある程度通底している。すなわち、「ビルばかりで環境が悪い」「にぎやかだけど、空気が重い」など上海の現状に満足しきらず、他の環境への憧れを示している点である。しかもそれが、海外の都市へ向かわず、国内の自然へと向いている。また、ここで語られるロマンは、中国のオリジナルなものの発見、山中でなければ見られない動物との出会いなどであり、名山において固定された周遊ルート上で提示される景観を観賞する態度とは異なっている。

両者の共通点を理解するには、現代上海の若者の生育環境に目を向ける必要がある。すなわち、1980年代以降に生まれた20歳代前半の若者にとって、物心が付いた時にはすでに上海は現代的で先進的な大都市であった。また、彼らは、親の世代のように「上山下郷」によって僻地で苦勞する経験もなく、90年代の高度経済成長を背景に物質的にも豊かに暮らしてきた。さらに、グローバル化による情報量の増加は、彼らの知識の質を伝統的なものから遠ざけもしただろう。彼らのこういった生育歴が、30歳台以上とは異なる「山に対するまなざし」を形作っていると言えるであろう。

ケース26：登山が好き。登山はプロ的な登山ではなくて黄山や泰山など登りやすい山へ登る。山に登るのは、登ると景色がいいから。登山靴、登山用のバックパックなどは持っている。3年前に用具を買い始めた。行くときには登山好きの友人と行く。これは主に大学時代の友人、スポーツクラブで知り合った友人もいる。登山のクラブや団体は、大学ではなく外部にある。なぜかという、大学生では金銭的な負担が大きすぎるから。私はこういったクラブには参加したことはない。山が好きなのは、ずっと上海に住んでいて、ビルばかりで周囲の環境が悪いから、違う環境の場所へ行きたいという気持ちがある。また登山には健康促進の面もある。それに、私は外国の風物よりも、国内の自然など、中国のオリジナルなものを発見したい。登山にはそれがある。登山は50代の人には体力が必要なので人気がないが、若い人には健康のためにもなる、刺激がある活動だと思う。私の場合も、山へ行く時には、探検的なことを目的にしておき、裏側の道のないところなど、人の行かないところへ行く。もちろん、まだ登山人口は少ない。登山をする男女の比率は同じぐらいだと思う（No.8, 24歳・女性）。

ケース27：初めて行った旅行は1年前の夏休み、高校の修学旅行での黄山です。クラブ活動で、絵を描くために行きました。風景や、山、湖の絵です。湖がきれいでした。

30人ぐらいの一行で、列車で黄山まで行き、その先はバスに乗りました。旅館は4人1部屋で、着いた夜は、好きな人のこととか、徹夜で話をしました。翌日からは絵を描いたり、あちこちの旧跡に遊びに行ったりして1週間ほど滞在しました。費用は1200元、お父さんが払ってくれました。また700元ぐらいのお小遣いを使いました。それでお土産を買いました (No.17, 女性・20歳)。

ケース28：2003年に友達と温州にある雁蕩山に登山に行きました。7～8人で行きました。みんな学校の友達です。男子3人、女子が4～5人です。山に登って頂上から眺める自然の風景はきれいでした。近くにある滝の水がおいしい水でした。登山は好きです (No.24, 20歳・女性)。

ケース29：登山へは1ヵ月に1, 2回、週末に行く。行き先は上海に近いところであり、だいたい2泊する。普通、金曜に行って日曜に戻ってくる。今まで行った場所は杭州附近の龍門山、永安山などである。行くときには10人ぐらいの友人と行く。費用は1人100元～200元程度である。一緒に行く友人はインターネットで知り合った人たちである。ネット上に登山のクラブがあり、そこに自分の登山の計画を書き込むと、それに賛同した人たちが参加し、一緒に行く。行くときには知らない人もいるが、一日遊ぶと友達になり、後は連絡を取り合う仲になる。登山なので、ホテルには泊まらず、寝袋を持っていく。ネットへの書き込みは、「今度はどこの山に行こうか」とか、そんな感じ。山登りの感覚が好きだ。登山道具はすべて持っている。登山靴は1000元ぐらい、登山道具全体で5000元ぐらい。登山は今年の春節に開始した。登山のために四川へも行ったことがある。四川の姑娘山 (5300m) へ行った。出発して戻るまでに10日かかった。今年のゴールデンウィークに行った。ふもとには人がいたが、登ってしまくと人がいなくなる。それが好きだ。この時もネットの友達10人で行った。10人中、女性は2人だった。こういうことは男性の方が多い。費用は2000元ぐらいだった。また、春節の頃登山を開始したというのは、ネット上で登山のクラブに入会し、会員になった。このクラブでは毎週1～2回トレーニングがあり、それにも参加している。トレーニングは同済大学で行っている。普通のものには費用はかからないが、ロッククライミングの場合には1回30元かかる。指導者はクラブの人であり、同済大学の人ではない。ただ、場所を借りているだけである。これからもっと高い山に登りたい。新疆の慕士塔格 (7500mぐらい) など。チベットではなく新疆に高い山がたくさんある。酸素を背負っての登山の訓練なども受けたことがある。未踏峰に登るのは、近くに未踏峰があるなら登りたいと思うが、普通は遠いところにあり非現実的だ。外国の山は、今のところは登りたいとは思わない。中国にはたくさん山があるので、今のところ行く必要がない。山の奥は気持ちが良い。動物も見える。空気もいい。上海という都市はにぎやかだけど、空気が重い。私は静かな場所が好きだ。昔から山に登りたかったが、それは思うだけだった。ネット上にクラブを見つけ可能になった。山に登りたいと思い始めたのは、映画をみたりして憧れるよ

うになった (No.12, 男性・23歳)。

### 3. おわりに

現代のヨーロッパにおける自然に対するまなざしは、プレモダンからモダン、モダンからポストモダンの、二つの変化を経て形成されている。プレモダンからモダンへの変化は、近代的意味での観光およびリゾート等の活動の生成に関わるものである。これは、山や海・浜辺などが、魔物が棲息するカオス領域から科学的に説明される場所になり、その景観がロマン主義的に美化されると同時に、保養に適した明るく健康的な場所として位置づけられていく過程であり、さらにそれが大衆化する過程である。また、モダンからポストモダンへの変化は、ブルジョア階級の秩序を転倒するとともに、大衆的価値観からも自らを切り離そうとする「サービス階級」あるいは「知識階層」の嗜好として現れる。ここでは、「田舎」や「自然」、それにまつわるモノは、「健康」「清らかさ」「秩序ある平和な麗しき過去」等となる。これは同時に、モダンにおける大規模な都市再興に対する幻滅を含むものであるとも指摘される。

インタビューケースに現れた上海の20歳台の若者たちのまなざしには、大都市に対する幻滅と清らかな自然への憧れがある。また同時に、彼らの登山は今までは容易にアクセスできず未知の場所に満ちていた自国、中国を広大で豊かな自然を持つ国として発見し直す行為ともみなすことができる。この点で、30歳台以上と彼らの間のまなざしの乖離を、プレモダンからモダン、モダンからポストモダンへの変化というふうにヨーロッパにおける変化をそのままなぞって、結論づけることはできない。また、彼らの目はむしろ中国国内へ向けられていたが、イギリスやオーストラリアなどの国への留学に憧れる若者も少なくない。実際、No.3, No.6の女性は、インタビュー時に、自分たちの子どもを留学させる準備をしていると語った。この意味で、彼らの示した傾向が大都市の若者の動向を代表するものであるとも言えない。

本稿ではインタビュー調査に現れた傾向を示すに留め、アンケート調査の実施を待つて、あらためて詳細な考察を行いたい。

#### 註

- (1) 中華人民共和国国家旅遊局編『中国旅遊統計年鑑 2003』による。
- (2) たとえば、アラン・コルバン『浜辺リゾートの誕生』、ジョン・アーリ『観光のまなざし』等があげられる。
- (3) 汪涌豪、俞灝敏著『中国遊仙文化』(鈴木博訳、青土社、2000年) 参照。
- (4) 阿部いづみ他編『中国悠々紀行 黄山』(小学館、2004年)、(株)アンドリュース・クリエイ

- ティヴ編『世界遺産を旅する6 日本・中国・大韓民国・東南アジア』（近畿日本ツーリスト, 1998）, 「地球の歩き方」編集室編『地球の歩き方 中国 '04~'05』（ダイヤモンド社, 2004年）参照。
- (5) 3つのガイドブック, 『地球の歩き方』, 『中国悠々紀行』, 『世界遺産を旅する』の全てに, 徐霞客のこの言葉は引用されている。
- (6) 黄利他編『中国登山聖經』（南海出版社, 2003年）参照。
- (7) 他に, 「登山溯源 從莎木尼到珠穆朗瑪」（西藏自治区旅遊局編『西藏旅遊』2004. 2, 総第63期, 《西藏旅遊》雜誌社, 2004年）を参照した。
- (8) 「登山運動与北大」(<http://edu.netbig.com/rank/st1/st02/505/20000525/25587.htm>) 参照。
- (9) 「登山運動与北大」(<http://edu.netbig.com/rank/st1/st02/505/20000525/25587.htm>) 参照。
- (10) たとえば, 雑誌としては『山野』, 『戸外探検』などがあげられる。
- (11) 成有子, 姜宝義著『中国探検旅遊地図』（海天出版社, 2003年）参照。
- (12) 神農伝説にかかわる場所は神農架ばかりでなく, 山西・太原の神釜丘（神農が薬を嘗めた鼎がある）, 成陽山の神農原（神農が薬をたたいた場所）などがある（袁, 1993, 176）。
- (13) 中根研一著『中国「野人騒動記」』（大修館書店, 2002年）参照。
- (14) (株)アンドリュース・クリエイティヴ編『世界遺産を旅する6 日本・中国・大韓民国・東南アジア』（近畿日本ツーリスト, 1998年）参照。
- (15) ホームページ ([http://www.pandaclub-jp.com/new\\_page\\_46.htm](http://www.pandaclub-jp.com/new_page_46.htm)) 参照。
- (16) ホームページ (<http://www.xitongnet/hztour/shokai.htm>) 参照。なお, 同名の山は広西省チワン族自治区にもあり, こちらも仙境とされる。

## 参考文献

- アーリ・ジョン『観光のまなざし 現代社会におけるレジャーと旅行』加太宏邦訳, 法政大学出版局, 1995 (John, Urry 'The Tourist Gaze— Leisure and Travel in Contemporary Societies' 1990)
- 阿部いづみ他編『中国悠々紀行 黄山』小学館, 2004年
- 袁珂『中国の神話伝説 上』鈴木博訳, 青土社, 1993年
- 汪涌豪, 俞灝敏『中国遊仙文化』鈴木博訳, 青土社, 2000年
- (株)アンドリュース・クリエイティヴ編『世界遺産を旅する6 日本・中国・大韓民国・東南アジア』近畿日本ツーリスト, 1998年
- コルバン・アラン『浜辺の誕生 海と人間の系譜学』福井和美訳, 藤原書店, 1992 (Corbin, Alain 'Le Territoire du Vide— L'Occident et le Desir du Rivage (1750-1840)' 1988)
- 「地球の歩き方」編集室編『地球の歩き方 中国 '04~'05』ダイヤモンド社, 2004年
- 中根研一『中国「野人騒動記」』大修館書店, 2002年
- 成有子, 姜宝義『中国探検旅遊地図』海天出版社, 2003年
- 黄利他編『中国登山聖經』南海出版社, 2003年
- 胡平『中国旅遊人口研究 中国旅遊客源市場の人口学分析』華東師範大学出版社, 2002年
- 焦潤明他編著『当代中国社会文化変遷録』沈陽出版社, 2001年
- 西藏自治区旅遊局編『西藏旅遊』2004年第2期, 《西藏旅遊》雜誌社, 2004年

新疆人民出版社主弁『探検』2004年第7期《探検》雑誌社, 2004年

張広瑞他編『中国旅遊発展：分析与予測 2002-2004年』社会科学文献出版社, 2003年

中国登山協會主弁『山野』2004年第7期,《山野》雑誌社, 2004年

中華人民共和国国家旅遊局編『中国旅遊統計年鑑 2003』中国旅遊出版社, 2003年

<http://edu.netbig.com/rank/st1/st02/505/20000525/25587.htm>

[http://www.pandaclub-jp.com/new\\_page\\_46.htm](http://www.pandaclub-jp.com/new_page_46.htm)

<http://www.xitongnet/hztour/shokai.htm>